序　　文

東京大学医学部
井　上　英　二

本報告書は，昭和４９年の「母子の健康と遺伝的要因に関する研究」，昭和５０年の「心身障害の発生予防に関する遺伝学的研究」に続く第３年度の研究報告書であって，今期の「厚生省心身障害研究遺伝研究班」の最終報告である。

今日の医学教育は言うに及ばず，日常の診療・疾病予防活動において，人類遺伝学がきわめて重要視されるようになったことについては，改めて多言を要しないであろう＊。人類の健康を障害する諸々の疾患の中には，個体の遺伝子型その他の内的要因が発病と密接に関連する数多くの疾患があるが，このような疾患から個人，家族，集団が受ける影響を無視できない時代が到来しているのである。既刊の報告書にもくり返しのべたように，すべての出生児の５％ないし5.5％は，その後の生活途上において，この種の疾患の何れかに罹患するものと推定されている。

一方，この種疾患のそれぞれについて，その遺伝機構を明らかにし，その知見に基いて対策をたてるために行なわれた臨床的基礎的研究は，近年目覚しい進展を遂げている。しかし，その成果を国民の健康水準の維持・向上のために還元する段階になると，いろいろな分野の活動を体系化し，現存している種々の制約を乗り越えなければならない。我が国における第一線の人類遺伝学，関連科学の研究者が，この研究班の発足以来一方ならぬ協力を惜しまれなかったのは，この点についての深い認識を共通して持っていたからに他ならない。

遺伝性疾患の予防活動は，当事者すなわち，次世代の人々を送り出す親たちの自発的意志に発するものである。そして種々の予防方策は，親たちの意志に応じて提供されるものである。本研究班が，疾患の発生機構の研究のみならず，遺伝相談を中心とする予防システムの研究に重点を置いた理由はここにある。

３年間の研究成果を一言にして言えば，各課題は，当初に計画されたそれぞれの段階に到達し，部分的にはそれ以上の成果を収めたと言えよう。以下の総括報告には，各細分課題が到達した段階を要約して記載したが，この要約は，今後継続発展すべき研究課題についても示唆を与えるであろう。これらの成果

の活用は，一に今後の衛生行政担当者，国民の理解と意欲にかかっているといっても過言ではあるまい。幸いに，諸種の予防方策のうち，早期治療のための新生児代謝異常スクリーニングと遺伝相談システムの二本の柱が昭和５２年より立てられることになった。この柱を支える基礎となる研究の進展と，この柱を中心とする予防システムの整備は，今後の重要な課題の一つである。

本研究班のすべての研究活動と運営に多大の努力を傾注された幹事荒川雅男教授，同代理和田義郎講師，幹事松永英部長，同田中克己教授，同半田順俊教授，実際の研究活動を担当された分担研究者および研究協力者各位その他の研究者，評価委員として貴重なご意見を頂いた井関尚栄所長および高原滋夫名誉教授，莫大な事務の処理をお願いした経理担当者津田威氏，研究班事務担当池田澄子氏，同清水郁子氏に深甚の感謝を捧げたい。

＊　日本学術会議生物科学研究連絡委員会遺伝分科会の「人類遺伝学将来計画」を参照。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

本報告書は,昭和 49 年の「母子の健康と遺伝的要因に関する研究」,昭和 50 年の「心身障害の発生予防に関する遺伝学的研究」に続く第 3 年度の研究報告書であって,今期の「厚生省心身障害研究遺伝研究班」の最終報告である。

今日の医学教育は言うに及ばず,日常の診療・疾病予防活動において,人類遺伝学がきわめて重要視されるようになったことについては,改めて多言を要しないであろう＊。人類の健康を障害する諸々の疾患の中には,個体の遺伝子型その他の内的要因が発病と密接に関連する数多くの疾患があるが,このような疾患から個人,家族,集団が受ける影響を無視できない時代が到来しているのである。既刊の報告書にもくり返しのべたように,すべての出生児の 5%ないし 5.5%は,その後の生活途上において,この種の疾患の何れかに罹患するものと推定されている。